



ICT 海外ボランティア会会報

No. 57

2015年5月12日(火)

Home page : <http://www.ictov.jp/>

e-mail : info@ictov.jp

目次

◆ 巻頭言

[JICA ボランティアの底力と心意気](#)

[国際協力機構 \(JICA\) 監事 伊藤 隆文氏](#)

◆ 特別寄稿

[勝ち負けじゃない。真剣勝負の回数だ。ツーとカー。十五秒で事足りる](#)

[ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝氏](#)

◆ 特別寄稿

[テレコム今昔](#)

[富士通株式会社エグゼクティブフェロー 雄川 一彦氏](#)

◆ 海外 IT 事情

[インドの携帯電話市場：まだまだ成長の余地が高いスマートフォンと
コミュニケーションの中心となったメッセージングアプリ \(その2\)](#)

[情報通信総合研究所 副主任研究員 佐藤 仁氏](#)

◆ 技術協力の思い出

[サウジアラビア国通信関係技術協力について \(その1\)](#)

[杉村萬国特許事務所会長 杉村 興作氏](#)

◆ 技術協力の思い出

[ネパールで青年海外ボランティア \(JOCV\) 活動](#)

[日本コムシス株式会社栃木支店長 遠藤 和彦氏](#)

◆ 現地便り (コロンビア便り 7)

[カリ市の噴水](#)

[SV コロンビア 野村 徹氏](#)

◆ 第15回 海外情報談話会 開催模様

[事務局](#)

◆ 第16回 海外情報懇談会 開催のお知らせ

[事務局](#)

巻頭言

JICA ボランティアの底力と心意気

国際協力機構（JICA） 監事 伊藤 隆文

2011年3月11日。私は、福島県の二本松駅から郡山駅に向かう東北本線の普通列車の中で東日本大震災に遭遇しました。当日は、平成22年度4次隊の派遣前訓練の終了式の日で、青年海外協力隊事務局長だった私は、二本松訓練所に出張し、式を終えて東京に帰る途中でした。

同じ列車に、訓練を終えた協力隊員・シニアボランティアの人たちも約30人乗っていました。震度6強の凄まじい揺れが5分以上も続き、列車が横倒しになるか、線路の路盤が崩れて列車が流されるか、どちらかを覚悟しました。（幸いどちらにもなりませんでしたが・・・。）

列車の中に、遠足帰りとおぼしき幼稚園児の一行がいて、園児たちは恐怖のあまり、泣き叫び、逆に硬直状態になる子もいました。おろおろする先生たちを助け、協力隊員の人たちは、園児たちをあやし、抱きしめ、歌を歌って励まし続けました。幼児教育の隊員もいたようです。

地震発生と同時に列車が停止した所で、2時間ほど車内に缶詰めにされ、夕方になってようやく近くの公民館に避難するよう車内放送が流れました。園児たちを含め、すべての乗客が線路に降りるのを介助し、車内に忘れ物などが無いかを点検し、2011年3月11日。最後に公民館に向かったのは、協力隊員を含めたJICAボランティアの人たちでした。日もとっぷりと暮れていました。

誰かが号令をかけたわけでもなく、ごく自然体で皆が力を合わせて、こうした行動が取れる。JICAボランティアの底力、ボランティアを志す人たちの心意気が、地震の恐怖とともに、今も脳裏に刻まれています。

のちに、この時のJICAボランティアの活躍に対し、JR東日本から二本松訓練所に感謝状が贈られたと聞きました。

（注）本稿は、JICAの社内報に掲載した拙文に、加筆・修正したものです。

特別寄稿

勝ち負けじゃない。真剣勝負の回数だ。ツーとカー。十五秒で事足りる

ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝

【真藤 恒氏語録】

浅い経験、真剣のない経験では、いくら年をとってもしようがない。

短い時間でいいから、場合によっては瞬間でもいいから、本気になって、事を処理した経験の累積というのは一番大事である。真剣に勝負をやって負けてもいい、真剣勝負をやった回数が、その人のポテンシャルなりタレントのベースになる。不真剣なことをなんべんやっても、それは熟慮不断行の材料になるだけである。

いかなる瞬間も真剣にというわけにはいかないが、ある瞬間だけその境地でやる。その割合が多いほど能力が出てくる。一日のうち何回か、あるいはある時間の間は、その真剣さを持ってということである。それが本当の人生の経験である。

報告というのは、どういう性質の報告を、どういうタイミングにするかで、その人が真剣にやっているかいないか、顔色を見ているのか、チャランポランにやって要領よくお茶をにごしているのか、すぐわかる。

権限を委譲したほうもされたほうも、真剣にやったら、どうしたかなと思っている頃には、ちゃんと何か言ってくるものである。そういう場合には、「あれはどうした」といえば、「こうしました」と一言で、それならいいや、それなら次こうしたらどうだというふうに、10秒か15秒の会話でパッと通じてしまう。それが本当のディセントラリゼーションされた仕事の姿だと思う。

【石井 孝氏のひと言】

この語録のような状況で仕事が出きれば、人間として最高の幸せではないであろうか。

真剣に仕事に対峙出来るのは、利害、欲得などといったものから一切離れ、純粋な境地で仕事に向かえる時でしかないと思う。

こういう雰囲気になるには、先ずはリーダーが純粋でなければならない。それが、心ある仲間達（敢えて部下とは言わない）に伝染し真剣勝負ができる場を創る。その場における議論は、上下関係は全くなくなる。

ただし、人間は感情の動物であるから、親分に対しこの人のためなら、といった気分がわからないと場は長持ちしないかもしれない。

真藤さんは、こういう雰囲気を創る、怖くて優しい人であった。

特別寄稿

テレコム今昔

富士通株式会社エグゼクティブフェロー
雄川 一彦

ITU (国際電気通信連合) は、1865年の国際電信会議の合意により設立されたとのことで、今年、150周年を迎えることから、様々な記念行事が予定されている。ご存知のように、ITUは国連の機関として、情報通信に関する数々の活動を行っている。ITU-T (92年以前はCCITT) やITU-R (同じくCCIR) に参画されて国際標準化活動に携わった方々も多数いらっしゃるものと思う。

私自身も、今から四半世紀近く前の一時期、当時在籍していたNTTの社員としてITUの活動に携わった経験がある。最近、と言ってももう数年前になるが、縁あって現在の会社に移ってから再びITUの活動に関わる機会が出て来た。勿論、この20年余りの間、この方面に全く無関心であったわけではないが、この間のITUを取巻く環境の変化を改めて実感した次第である。この場を借りて、そのあたりの感想を述べることにする。

まず、標準化活動について。ITUの外で盛んに標準化活動が展開されるようになってきている。現在もITUにおける標準化活動は粛々と進められているのであり、むしろ、他が大きく発展したと言うべきである。移動通信については、GSMから発展した3GPP (3rd Generation Partnership Project) など欧州主導の流れが定着しているように見える。また、インターネットについては、IETF (Internet Engineering Task Force) のようなデファクト (事実上の) 標準による米国主導の流れが定着しているように見える。従来の固定電話が主流だった時代から、移動通信やインターネットの発展普及を経てきた流れと軌を一にするところである。勿論、だからと言って、例えば、移動通信について言えば、無線周波数割当てはITU-Rが行うことになっているので、デジュール (法律上の) 標準化機関としてのITUの地位は揺るがない。しかし、デファクト標準とデジュール標準の関係など、難しい環境にあることは確かであろう。

更に、情報通信技術の進展に伴い、その対象とする範囲が広がっている。最近では、IoT (Internet of Things)、Big Dataなどの話題もITUにおける標準化の検討対象に上がって来ている。しかし、「果たしてどこまでを標準化すべきなのか」というところも明確になっていない。

次にテレコムについて。テレコム (ITU Telecom) は、世界のICTコミュニティが参加するイベントで、71年に「Telecom 71」と銘打ってジュネーブで開催された。その後、ジュネーブで4年に1回開催されている。私は、海外ベンダー製品の調査を目的として、Telecom 91 (91年、ジュネーブ) に当時のNTT通信ソフトウェア本部から派遣された。当時のTelecomは政府、キャリアの参加はもとより、多数の有力ベンダーが機器を展示し、大変な盛況であったと記憶している。

その後、85年のAsia Telecom 1985 (シンガポール) から、4年に1回開催されるジュネーブのTelecomはそのままにして (2003年からジュネーブのTelecomは、Telecom Worldと改称)、アジア、アフリカ、



アメリカ、ヨーロッパ各々で開催されるようになった。40周年を迎えた2011年のTelecom World 2011 (ジュネーブ) 以降、毎年場所を変えてTelecom Worldを開催することとなった。

私はTelecom World 2011 (ジュネーブ)、Telecom World 2013 (バンコク: 左写真) を視察する機会を得た。20年前とは様変わりで大変驚いた。まず、全体として閑散としている。出展者は各国政府が主体でキャリア、ベンダーは疎ら。我が国は政府が出展場所を確保し、そこに何社かが相乗りという状況である。20年前のような活気は無くなっている。昔のTelecomの活気は、バルセロナで毎年開催されているMWC (Mobile World Congress) に移ってしまったように感じる。

このように、20数年の時を隔てて見るとITUを取巻く環境は大きく変わってしまったように見える。この間の情報通信技術の発展が如何に大きなものであったのかということの一つの証左であろう。このような中で、昨年、ITUの事務総長が中国から、また標準化局長が韓国から選ばれた。中国、韓国はITUの活性化に向けて注力しているように見える。我が国としても、どのように対応して行くのか、考える必要があると思う。

海外 IT 事情

インドの携帯電話市場：まだまだ成長の余地が高いスマートフォンとコミュニケーションの中心となったメッセージングアプリ（その2）

情報通信総合研究所 副主任研究員 佐藤 仁

■インドでコミュニケーションの主役となったメッセージングアプリ

2014年11月27日、GlobalWebIndex (GWI)がインドでのメッセージングアプリの調査を公表したことを、「The Economics Times (インド)」が報じた。インドで利用されているメッセージングアプリのうち52%がFacebook傘下の「WhatsApp」を利用しており、2013年と比較して334%増加したことがわかった。

以下がインドでのメッセージングアプリの利用状況である。

	メッセージングアプリ	利用者の割合	前年比
1	WhatsApp	52%	334%増
2	Facebook messenger	42%	192%増
3	Skype	37%	190%増
4	WeChat	26%	2356%増
5	Viber	18%	NA
6	LINE	12%	NA

(GlobalWebIndex 発表 2014年11月を元に作成)

Facebook傘下の「WhatsApp」が半数以上のインド人が利用していることがわかった。また、中国のメッセージングアプリ「WeChat」の台頭が著しい。GlobalWebIndexによると、世界でインターネットを利用している人のうち23%が「WeChat」を利用しており、アジア太平洋地域では39%が利用しているとのことである。さらにインドでの「WeChat」利用者のうち64%がモバイルで買い物をしたことがある。また68%はいつもモバイルで写真をアップしており、58%が無料通話を利用していることがわかった。

インドでは2014年第3四半期でインターネットにアクセスした人のうち83%がモバイルからである。またインターネットにアクセスできる人のうち79%はスマートフォンを所有している。そして、現在、世界のインターネット利用者のうち40%がメッセージングアプリを利用し、アジア太平洋地域のインターネット利用者のうち46%はメッセージングアプリを利用している。

メッセージングアプリは利用者が増加すればするほど、それに伴って利用者が増加する。友達や知人、会社の同僚などとのコミュニケーションのプラットフォームが従来のSMS（ショートメッセージ）からメッセージングアプリに移行してきている。またインドだけでなく世界中でスマートフォンが普及していることによって、メッセージングアプリ利用はこれからも増加することは間違いないだろう。

メッセージングアプリは基本的に無料でメッセージ、通話ができることが「ウリ」である。Facebook傘下に入った「WhatsApp」も赤字であることが先日判明した。多くのメッセージングアプリは無料で提供して、そこに集まった人にゲームやスタンプなどを販売することによって収益を上げていこうとして

いる。メッセージングアプリは世界中で拡大し、コミュニケーション・プラットフォームの中心にはなったが、彼ら自身がどのように収益を上げていくか、その戦略が明確で、それに沿ったキャンペーンやマーケティングを行わないとただ利用者に無料で使われているだけになってしまう。

さらに、インド市場に注力したいGoogleもインドでメッセージングアプリの開発を行っており、2015年にリリースを目指していると2014年10月3日付のインド「Economic Times」が報じている。Googleは正式にコメントをしていない。Googleはインド市場に注力している。2014年9月には「Android One」を搭載したスマートフォンをインドで販売することを発表した。1台105ドルの端末でインドの地場メーカーMicromax、Karbonn、Spiceから販売されている。インドでは携帯電話販売出荷に占めるスマートフォンの割合は30%程度であるが、スマートフォンの低価格化に伴って今後は大幅に出荷増が想定される。インドではすでに30ドル台のスマートフォンも登場しており、Googleが105ドルで投入したスマートフォンもインドでは高い方である（参考：Googleも105ドルスマホ投入：低廉化するスマートフォンが変えるインドの携帯電話市場）。インドで30ドル台のスマートフォンを提供してきたのはAndroidではなく、「Firefox OS」である。現在、世界のスマートフォン市場で90%のシェアを誇るAndroidも新興国市場でもシェアが取れるかどうかは、まだわからない。

Googleはかつて世界最大のメッセージングアプリでインドでも大人気の「WhatsApp」を買収しようとしていたことがあるが、最終的に「WhatsApp」はFacebookに190億ドルで買収された。Googleは世界中の多くの情報を収集することによって、広告を配信していくことをビジネスモデルとしており、そのためにAndroid OSも無料で提供し、Google検索、Gメール、YouTubeなどGoogleが提供するサービスを利用してもらうことによって、そこから多くの情報を収集していきたい。



日本では「LINE」が有名なメッセージングアプリとして、現在先進国だけでなく、インドでも普及してきている。世界中でコミュニケーションのプラットフォームとして成長してきたメッセージングアプリ

では、あらゆる情報がそこでは流通されている。Googleとしてもメッセージングアプリは押さえておきたい事業であろう。

インドでは「WhatsApp」や地場のメッセージングアプリ「Hike」の人気の高い。1人で複数のメッセージングアプリをダウンロードして利用している。利用できる機能は、どのメッセージングアプリでもほぼ同じである。非常に競争が激しいサービスであるが、後継であるからといって不利であることもない。またジャイ



(インターネットカフェでSIM販売チャージも行っている)

アント企業が参入したからと言って優位ということもない。メッセージングアプリは1か国だけで提供するのではなく、世界中で提供できるサービスである。今回の報道はGoogleがインドで提供することだが、リリースされたら、もちろん世界中で提供されるであろう。Googleはメッセージングアプリ市場に進出してくるだろうか、そしてGoogleが進出してくることによってメッセージングアプリ市場はどう変わるだろうか。

技術協力の思い出

サウジアラビア国通信関係技術協力について（その1）

杉村萬国特許事務所会長 杉村興作

本稿は「サウディアラビア」誌（日本サウディアラビア協会）第5号（1962年2月号）より著者の了承を得て転載するものです。（事務局）

サウジアラビア国（以下サ国）の電気通信プロジェクトの件がわが国に話しが参りましたのは、昭和35年の夏のことであります。当時鉄道関係の会議で来日されたサ国交通大臣スルタン殿下がアラビア石油の岡崎氏を通じ、日立はじめ、日本電気、沖、富士通4社に照会がありましたが、問題が大きいとのことで電気通信協会及び日本電信電話公社にこの話が移されたものであり、その後要請の内容は「サ国各地に通信の拡充を希望しているが、之に関しシーメンス、フィリップス、ジェネラルエレクトロリック等の4社の見積の審査をして貰いたい」と云うことであります。その後在東京サ国大使館より度々のご指示があり、続いて両国政府間の折衝にこの話が移され、電電公社より私を含む3名が選ばれ同国へ出張を命ぜられたのです。

第1回調査団は35年11月24日東京を出発、同26日にはジェッダ市に到着、日本大使並びにサ国当局と詳細打合せを終え、27日より直ちに市内の視察を開始するという様な極めて目まぐるしい日程で約一月半各都市を巡り、各都市の街路、戸数等の概略を調査し、視察し歩いたのです、

同年12月14日に首都リヤドにおいてスルタン殿下にお目にかかり、以上の期間における調査の状況を報告申し上げた訳です。同殿下はわれわれの努力を大いに認められ、在来の設計は規模の点で全然役に立たないから、改めて日本に通信拡充に関する設計及び同仕様書の作成を依頼したい旨の御要望があった訳であり、将来の国際入札には日本からも是非参加して貰いたいとのことでした。尚この際念のためサ国政府の考えとして、最新形を望むか、安物を望むかの方針を伺いましたところ、同大臣は即座に世界で最高の品質のものを必要とするというお答えいただきました。

その後確認の文書も交換し、日本大使館を煩わして、日本へ報告した訳であります。そして帰国後、電々公社の海外連絡室の指導の下に、数カ月かかって、御注文通りの仕様書を作成し、外務省のご好意により先方に無事送付いたしました。

その後36年8月に公社より線路関係技術者を派遣しました折、再度先方当事者より要望があり、わが国で送った仕様書の外線関係については図上設計である為、数量が明確でないので更に詳細測量に基

づく設計をして貰いたいという要望が出てまいりました。これについては両国間に種々の折衝がありましたが、やはり電々公社が主体になって8名の調査団を編成し、サ国各都市の線路設計を2カ月間に亘って行ったわけでありませぬ。

この調査団は、自分で言うとおかしおかしと思われませぬが、全く良く働いたのであり、実に膨大な各都市の測量を始めとする全ての集落に対する電話ケーブル線等まで残らず調査設計した訳であります。更に調査団は資料を集めて帰国後に約3カ月かかって、どこの国が工事を請け負っても間違いなく工事が出来る様に詳細な図面を作成し、又前回大臣のご指示通り、最も新しくかつ便利な電話設備の設計書を完成したのであります。設計仕様書は印刷代だけでも数百万円かかるものでありましたが、幸い電々公社の経費を使用出来立派に仕上がりました。その全体の技術協力の内容は商業ベースであれば億以上の桁のものとのことだす。また作成担当者としては世界各国の競争者に対して公平に作成されたものであり、使用者側の立場に徹して、最高の品質で最も便利で且無制限に高くならない様、苦心を重ねて作成したもので、又企画等も国際規格を用いて居り、特に日本に有利に設計する様なことは全くありません。これに関してはその後一部の悪い噂があったそうだす、それらは中傷であり、審査に当たった諸外国に技術者はその技術レベルの高さとか設計の正当さ公平さを認め、正しい評価で賞賛して居りました。

この様な次第で結局第2次の最終使用書は37年の5月頃完成し、サ国側に寄贈されたものであります。この間の政府ベースの技術協力は郵政省あたりが多少スローモーでしたが、全体としては極めてスムーズにかつ親切に行われたのであります。特に外務当局並びにわが在外公館には終始辛いところに手が届く程親切にお世話を頂きましたことは、忘れ得ぬ思い出であります。勿論サ国の当局もわれわれと一体になり、これを完成したのであり、この間サ国にも多くの友人が出来、日サの友好関係を深め、又日本技術者の評判も高めたと思つて居ります。

以上の如く、政府ベースにおける協力は極めてよかつたのですが、わが国の商業ベースの輸出努力は遺憾ながら、これに伴わず、その後最近発表されたところによりますと、この通信プロジェクト（邦貨約60億円）はわが国の日立社の入札は2番札の安値を示しながらも、これより高いスエーデン、エリクソン社に落札が決定したとのことだ、私としては折角の努力が終わりまで実を結ばずに多少残念に思つている次第だす。ただ第3者の立場で物をいつては申し訳ないだす、わが国のメーカーの努力が足りなかつた点もあることは事実の様にか考えられます。（中略）

当時、一般に日本品は安物という印象が依然として残つているのに対し、この考えを打ち消す様な正当な宣伝が行われていないことが第1の点であります。日本は戦争に敗れましたが、その後電話の復旧拡張には梶井前総裁の指導もあり技術陣営は並々ならぬ努力をして居り……（中略）、このため使用機器は世界で最高の品質レベルのものを使って居ります。（中略）この点早くから国際競争の激しいヨーロッパ系の各国と様子が異なります。ヨーロッパ諸国メーカーは品質を多少犠牲にしても、低価格ということを第1の目標で技術を開発しているのだ、可成り技術内容がちがいます。その代わりその宣伝並びに売り込む為の営業努力は極めて真剣そのものであります。（中略）しかし決して落胆することは無いのであります。（中略）われわれが努力したことは長くわれわれが友人達の胸中に残ることと思ひます。私自身も何も無駄なことをしたなどは毛頭思つておらず、国際的に良い仕事をしたと満足感をもつて居ります。ただ日本の業界が独立して全部やつていくことが不得意であり、会社間のまとまりの悪いこ

とを残念に思っていますが、これも今後は次第に改善されてゆくことでしょう。今後両国の一層の友好関係を祈って止みません。

追記 (2015年2月12日)

電々公社時代のサウジプロジェクトには、小生は4回出張しております。
第1回; 3名にて、各地の概要と10万回線の発注(仕様書作成)、日本も入札に参加して良いとのこと。
(1960/11 ~ '61/1)
第2回; 北川(泰弘)君と線路の親方('61)
第3回; 8名、各都市の概況と測量地図とケーブル図作成、入札仕様書(英文)を作成(1962 ~ '63)しましたが、メーカー(日立)にも原本は残っていないようです。
当時業界紙に寄稿した写しと日本サウディアラビア協会に依頼された文章が残っています。
入札仕様書は、小生と北川君との合作で、英文で約50ページ、約300部を協会へ送付しました。現在各地の地図+ケーブル主配管図は一部(2冊)のみ手元にあります。所要でしたらお目にかかけられます。
なお第4回目はサウジの田村大使の要望で、日本の入札成功の助けに行ったものでしたが、時既に遅く、商官の様子より、日本の入札は見込みないので、特別製品(単体の交換機等)を売り込むのがよいと、佐々木技師長へ報告し、日立は局所用交換機数台の販売に成功したとのこと。全体の落札はSwedenのEricssonとなりました。(日立の北村氏談)
1976年に小生は電々を退職していましたが、日通建の船津社長の依頼で再checkにいきました。石川好男君(故人)同行。

技術協力の思い出

ネパールで青年海外ボランティア(JOCV)活動

日本コムシス株式会社栃木支店長 遠藤 和彦

先日、ネパールを襲った大地震により現地では復旧作業の最中です。遠藤さんから寄稿して頂いたJOCV活動報告は災害前のネパールです。震災被災関係者にお見舞い申し上げます。(事務局)

1. 海外業務への登竜門

1973年というともう40年以上も前のことになる。自分が海外という境遇でどれだけやれるのか試してみたいという漠然とした思いから、当時クウェートで電気通信網構築工事のコンサルティングを行っていた電電公社への入社を選んだ。本格的な海外業務の準備段階として、まずは青年海外協力隊(JOCV)を経験してみようと考え、朝は英会話の暗記、晩には標準実施方法を読みふけること3年。未だ自己の技術不十分と知りつつも行きたい気持ちを抑えきれずに協力隊を受験。筆記・面接の試験を終えJOCVから合格の電報が届いたときはそれまでの人生の中で最も満たされた瞬間であった。

派遣される国は“ネパール”で当時は秘境。どのような国かイメージが湧かなかったが、本で知る限りヒマラヤの麓にあり、人々は穏やかで道で会う毎に「ナマステ」とあいさつし合う素朴な国らしい。東京・広尾研修所と参宮橋のオリンピック村で計4か月間の現地適応訓練・語学研修(英語)を終え出発したのは1977年4月、24歳であった。

2. カルチャーショック

バンコクを経由して平屋でレンガ造りののどかなカトマンズ空港に降り立った。さあこれからの2年間、何が待ち構えているのか、文字通り期待と不安に満ちあふれていた。幸いにも電電公社・国際電

電の先輩隊員達が線路・交換・搬送・無線・テレックスの5分野で計10名いて、そのうちのひとりとは同期入社の方だったのでは何かと心強かった。

到着から1週間、首都カトマンズでのホテル暮らしで体を馴染ませるといよいよ現地語学訓練が始まった。現地のJOCV駐在事務所員とドライバーと私の3名でランドクルーザーに乗り、カトマンズから北西へ75km程離れた山上の村に着くと、所員は下宿先である郵便局の主人に私を紹介し、「1か月後に迎えに来るから」と言い残し、1時間もしないうちに下山してしまった

さあ、この村に外人は私一人。ネパール語はナマステしか知らないのにシャワーのように現地語が降り注いでくる。英語を話せるのは麓の村で教師をしている下宿先の息子ほか数人のみで、朝と晩にネパール語の発音と文字を習った。村のほとんどの人と言葉が通じない。パサパサのご飯に豆の汁をぶっかけて食べる食事は朝夕の2回。毎朝道路に落ちている牛糞を拾い集めてきて土間に手で塗り清めたその上に食器を置き、あぐらをかき前かがみになって右手で食べる。時々ゴキブリが這い回るが金持ちの証と皆全く意に介さない。下半身裸の赤ん坊が傍でオシッコを垂れ流す。汚いし臭いし不味い。もう何がなんだかわからなくなってくる。

トイレは戸外の窪地で瓶に汲んだ水を持参して左手で洗い流しさらに残した水でその左手も洗う。用を足し終わると目の前で待っていた犬と鶏がそれをついばむ。夜になると蚊の羽音も聞こえないのになぜか痒くて眠れない。1週間後にそれはBed bag (南京虫) のせいとわかった。夜になると天井や土壁の隙間から這い出してくる人の血を吸い朝になると戻っていく。あずき色でテントウムシを3~5mm位に小さくした感じである。日本の生活とあまりの違いに気持ちが萎えそうになり、逃げ込むように下宿屋の自分の部屋に戻ると、日本人が珍しいのか扉の隙間から頭が3つ4つと重なってこちらを覗いている。我ながら『これがあれほど憧れて4年間も苦勞して手にした協力隊なのか』と情けなく、思わず涙があふれてきた。また、朝に昼によく眠った。この眠っている間にちょうどサナギが蝶に羽化するように徐々に現地のリズムに慣れてくるのを感じていた。

1週間も経つと村の人たちと馴染んできて、初めは皆同じく見えていた顔の違いも分かってきた。あれほど臭くて口に近づけるだけで「グエッ」となったネパール食が待ち遠しくなってくるから不思議である。まさに順応とはこういうことかと実感した。そして慣れると山からの湧き出てくる清水を少し、そしてまた少しと口に始めて3日目、ついに来た下痢。いよいよ“洗礼”が始まったと思いつつも2週間後には止まった(こういう時は水で洗うのに限る)。待ちに待った1か月後、所員が迎えに来てくれた時はまさに“地獄に仏”を見る思いであった。この1か月間のカルチャーショックのおかげでその後のネパールでの2年間とさらにそのあとで海外プロジェクトでタイ・フィリピン・インドネシア・ベトナムなどへ行っても全く違和感を感じなくなったのは私の人生上大きな成果であった。



現地電話局の職員と(中央筆者。左から4人目カウンターパート)

3. ボランティア活動開始

カトマンズに戻ってからはネパール郵電公社で先輩の桃山隊員と半年間活動をともした。桃山さんはカトマンズ市内の分局開始工事の設計中であり、私は市内のマンホールに入って地下ケーブルのプラントレコード作成からボランティアとしての活動を始めた。私の拙い技術（といえるほどのものは何も無かったのだが）を現地で伝えるためにカウンターパートが常に私の傍に付いていた。私にとっては、現地の生活案内や通訳もしてくれる心強い用心棒でもあった。彼があるマンホールに入った途端、頭を上げて「ハアハア」というので、「もしや?」と思って私も入ったところいきなり 50m 走を走り切った時のように息が切れ、すぐに酸欠マンホールとわかった。今思うとあやうくカウンターパートを死なせてしまうところだったと怖くなるが、当時は安全に対する意識が低く、屏風をマンホールの口に立てて布を下に垂らすだけの換気方法を日本国内でさえもやっていて、ファンによる強制換気＋有害ガス検知はまだ定着していなかった。

桃山さん帰国後の1年半、郵電公社内で日本人は私ひとりとなった。線路以外の隊員の活動が評価されず後任隊員の要請が郵電公社から出されなかったためである。いよいよ独り立ちしなければならない時が来た。

イギリスのコンサルタント会社が作成したマスタープランに則り、ネパール国内の主要な町に電話局を設置し加入者線路網を構築するのである。先ず都市計画局へ行ってその町の都市計画図の青焼きを入手する。町役場、病院、バザール（商業地域）、住宅地など計画人口と区画が描いてある。これを携えて飛行機で現地へ飛び、町の役人に会って街区を案内してもらう。

その後カウンターパートと需要予測・置局選定・架空線路設計の現地調査・概略設計・測量を1週間。カトマンズに戻り設計図作成に2週間。ポカラのような1,000端子規模の街でも約2週間で調査を終わらせた。この繰り返しで約1年半ほど設計作業に没頭する傍ら、時には直埋設ケーブルの故障点をメガー（絶縁抵抗計）と3号携帯試験機で探索も行なった。（仕事の話は尽きないのでここまでに・・・。）

4. ネパールならではの

協力隊に参加する前に先ず“日本”を知っておこうと北海道から沖縄までオートバイで走破したことがあって、運転に少し自信過剰になっていた。入国して半年後の10月、協力隊同期の隊員とダサイン（ネパールの正月ともいえる祭り）休暇にエベレストトレッキングを予定していたのだが、同隊員が肝炎にかかり治療帰国してしまったため、ならばネパール国内を東から西までこの目で見てみようと思いきや単独で東西800Kmのオートバイによるネパール横断を試みた。

その初日、インド国境に近い平原を走っていたときのことである。前にも後ろにももう何十キロも人家がない平原を走っていたら次第に日が暮れてきて急に辺り一面が真っ暗になった。ジャングルの中を切り開いた道に入ったのだとわかった。ヤバイ、走って早くこの場を抜けようと思う間もなく、進行方向の道の真ん中に大きな白っぽい砂利山のようなものが見えた。

オートバイが近づくにつれてそれは2つ、そしてその山が動いた。「ウワー」、右前に大きな頭・顔を振ってきた。太い角とシワシワの眼で瞬時にそれはインドサイであることがわかった。私の体は鼻先攻撃をかわしたものの後ろに積んでいた2週間分の荷物を詰めたアーミーバッグに当たり、バイクもろと



現在のカトマンズ市内ケーブル

も飛ばされた。転んだがまたこちらへ攻撃して来ると思い、咄嗟に30~40mほど走ってその場から離れた。辺りは静寂そのものであった。心臓の音だけがのどから飛び出しそうにドキドキ、ドキドキと高鳴っていた。あまりのあり得ない出来事に夢?かと思ったが、肘や膝を擦りむいて血が滲んでいたのもこれは現実と思うしかなかった。

ふと、この辺り帯は野生のトラやサイを象に乗って見物するチトワン野生動物公園内なのだと思いついた途端、背中の方にはトラがいるかも知れないと感じるや恐怖で生きた心地がなかった。

真っ暗なジャングルの中で動かないバイクと自分ひとり。孤独感の極限であった。あと50cm右側を走っていたら、サイの首辺りに正面衝突し、今ここにいなかったかもしれない。

5. おわりに

一昨年、35年ぶりにネパールへ妻と旅行に行ってきた。カトマンズ市内は5~6階建ての家が建ち並び人も多くなっていった。かつて鼻を指でつまみながら流れの中で齋戒沐浴をしていたバグマティ川は、ゴミだらけのドブ川と化していた。

電話線はあちこち傍若無人に張り巡らされ、時には店の看板が読めないほど大きな線束となって存在していた。メンテがされていない。おそらくその半分も使ってはいないだろう。故障するとその線を撤去せずにまた新しい線を張ってしまう。束になりすぎていて抜けないのである。観光しか産業のないネパールだからこそ古い街並みがよく見えるよう都市美観に重点を置くべきなのではないだろうか。できれば地下配線化したいところである。

このような事象はカトマンズだけでなくハノイでもそうだった。これらをきれいにするプロジェクトを起こしてみたいと考えるのは一人私だけではないと思う。機会があれば私もその一員として取り組みたいものである。

現地便り (コロンビア便り 7 最終)

カリ市の噴水

コロンビア SV 野村 徹

「地球の歩き方」でコロンビアの主な都市を見るとボゴタやメデジン、マニサレス等が紹介されています。我が街カリはありません。

つまりカリ市は観光地ではないということです。そんなカリ市を見てみて今更の様に気づいた事があります。それは街に噴水が多いということです。

私のアパートから派遣先である国立職業訓練校までバスで約30分かかりますがその間に噴水を5つ見ることが出来ます。噴水にはそれぞれに名称があるのでしょうが私は勝手に自分で名前をつけています。

添付した写真の1番目は「亀の噴水」と呼んでいます。池の中に銅像の亀が数匹いるのでその様に名づけました。



2番目は「船の噴水」と名づけました。船の甲板のようなところにお互いが助け合うような形の銅像があります。噴水は水が上に上がっていますがこの噴水と3番目の噴水は水が下に流れています。

3番目はスポーツの噴水と名づけました。スポーツをする若者をかたどった様に見えるからです。この噴水を通りすぎるとまもなく派遣先の学校が現れてきます。

4番目は「アメリカ噴水」です。なぜそのように名づけたかという理由は簡単でこの噴水が「プラサド アメリカ」というバス停の近くにあるからです。かなり大きな噴水で青空に勢い良く水が吹き上がっているとなんとなく気分がよくなります。

5番目は「近くの噴水」です。私のアパートから一番近くにある噴水です。噴水の周りにはベンチがありそこで人々はくつろいでいます。カリ市は緑が多く、噴水も多いのでその点は私も気に入っています。



◆ 第15回海外情報談話会開催模様

事務局

標記談話会は去る4月17日（金）、JTEC会議室において開催され、27名の参加がありました。講師



は東京大学名誉教授吉田真氏で、話題は「MOOCs (Massive Open Online Courses:大規模公開オンライン講座) ー世界の動向と展望ー」でした。話題の概要は以下の通りです。

近年のICTの進展、特にインターネット、オープンソフトウェア技術等に支えられて、教育へのICT利用とオープン化が、オフラインのCAIからオンラインの遠隔教育へ、さらに広く多様なe-learningの形で進展している。

特に、ここ2-3年での世界におけるMOOCs (Massive Open Online Courses)の急速な進展は目まぐるしく、その将来についても今だに混沌としている。その中であって、教育のオープン化の流れ、特にOER (Open Educational Resources)、OCW (Open Course Ware)、MOOCsの進展の背景から、世界の現状、日本のJMOC (日本オープンオンライン推進協議会)の取り組みを紹介され、



更に今後の課題を展望されました。

この講話を基に、MOOC 受講経験者を含め、多くの参加者から意見や提案がなされました。また FaceBook を通して石井 孝氏より「大変興味深いお話で面白かった。お話を伺って居て、ふと思ったのであるが、現在の教育は知識や技能などを教えることが主で、人間性とか人間力を鍛え、養成する教育が学校にも企業にも無くなって来ているのではないかと気づいた。なかなか難しいことかも知れないが、国や企業などが応援・加勢してMOOCsの中に人間教育の場（云わば、ICTを活用した現代の松陰塾とでも言ったようなもの）が出来ないものかと思った」。これを基にFaceBookを通してさらに意見交換がなされました。

◆ 第16回海外情報懇談会開催のお知らせ

主催 ICT海外ボランティア会
協賛 情報通信国際交流会

第16回海外情報懇談会を以下により開催いたします。

参加をお待ちいたしております。

日 時：平成27年6月12日（金） 午後3時～5時

場 所：JTEC（海外通信・放送コンサルティング協力）

（五反田駅下車徒歩5分、道順はJTECのホームページをご覧ください）

話 題：「福島第一原子力発電所事故における放射線量の計測と分析」

講 師： ナチュラル研究所長 石川 宏氏

講演概要：

東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故から4年経過しましたが、記憶は薄れることはなく、廃炉までまだ大きな努力を必要としています。これほどの社会を揺るがす事故は経験が無く、技術者として大いに考えさせられました。

私（講演者）は東京都日野市において、デジタル気象台を開設し、その一環として、ガイガーカウンタを設置し放射線量を計測し、ホームページに公開していました。事故直後に、日野市にも放射性物質が飛来し、異常データをキャッチしました。海外を含む多くのかたがこのホームページをご覧になり、思わぬ反響がありました

。

この瞬間をリアルタイムに、インターネットで見ることができたサイトは、ほとんどなかったようで、見えない放射能の恐ろしさに対し、ほかに適切な情報がなかったために、私のサイトに頼ったのではないかと思います。福島原発事故独立検証委員会（いわゆる民間事故調）の最終報告書に、当研究所の情報公開活動が紹介され、「政府あるいは東京電力は人々がもとめる情報発信をしてこなかった。そのなかで都内への放射性物質飛来を観測していたナチュラル研究所のサイトには多数のアクセスがあり有用であった」と紹介されました。

またその後も計測を続けており、最近のナチュラル研究の活動を紹介します。

参 加：入場無料 お気軽にどうぞ！（会員制ではありません）参加ご希望の方は、事務局 加藤隆 info@ictov.jp までご一報下さい。

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申し上げます。

送付先は、編集担当 加藤 隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp) , または
村上勝臣(katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp)までお寄せ下さい。

編集後記

- ・ 「巻頭言」を JICA 伊藤 隆文様にいただきました。JICA 研修所における逞しく且つ自主的な人材訓練の成果が遺憾なく発揮された様子を伺い、ほのぼのとした感慨も覚えました。また遠藤 和彦様に「技術協力の思い出」として、ご自身の JOCV 体験をご紹介いただきました。それで JOCV を経験された諸氏諸嬢の素晴らしさを再認識しました。私自身外で SV 活動中に、多くの JOCV の方々と接する機会があり、また駒ヶ根研修所で JICA 主催の 1泊2日の体験的見学会に参加し、彼等一人一人の行動に感嘆いたしました。彼等こそグローバル時代を担う人材であると信じています。
- ・ 特別寄稿を雄川 一彦様からいただきました。特に技術開発テンポが速い情報通信分野における今昔をご自分の実体験を通して紹介いただきました。雄川様には去る 3月に、海外情報談話会でご講演をいただき、共に深い含蓄が心に沁みました。
- ・ 長老の杉村興作様から、1950年代電電の海外技術協力のパイオニアとして、サウジアラビアでのコンサル業務のご寄稿をいただきました。恥ずかしいながらこの様な活動がなされたことを始めて知りました。貴重な記録で皆様にご披露できることをうれしく思うと共に、これらを含めこれらの記録の保存に努めたいと考えております。
- ・ この紙面をお借りして報告申し上げます。去る 4月 22日発生したネパール中部地震被災者支援のため、BHN テレコム支援協議会が行う初動調査メンバーとして当会幹事鈴木 弘道氏が 5月 2日に派遣され活動されています。氏は 2013年に SV としてネパールコンピュータ協会で活躍され、ネパールの地理や人脈に精通しています。また 22年前からネパールの山村に単独で赴き、村興しに献身的に活躍なされ、昨年 7月当会主催の ICT 海外談話会で講演された OK バジサンこと垣見一雅様は健在で、氏が精魂を傾けて作られた学校等もひび割れはあるものの崩壊は免れたとのことで安心いたしております。 (以上 加藤)
- ・ 石井さんの「真藤語録」は分社化を例にし、真剣に考える社員育成のあり方を論じている例でした。育成される側も如何に意志の高揚を図る工夫も必要になる。野口英世は黄熱病研究中に良く仲間とへボ将棋を真剣に指したようですが・・
- ・ ICR (情報通信研究所) 副主任研究員、佐藤仁さんに 2回に亘りインドの携帯電話事情を紹介いただき有難うございました。矢張り低廉なメッセージングアプリが現在席卷していますが目を離せません。
- ・ 遠藤和彦さんにネパールに於ける JOCV 活動報告して頂きました。現場での体験記述は感動しました。
- ・ 野村さんの「コロンビア便り」最終回、ありがとうございました。山下満男さんの「レソト便り」機会をみて掲載したいと思います。 (以上 村上)

総編集長：ICT 海外ボランティア会 事務局長 加藤 隆

編集長：ICT 海外ボランティア会 編集部長 村上勝臣

報道部長：ICT 海外ボランティア会 報道部長 山崎義行

発行：ICT 海外ボランティア会 (メール：info@ictov.jp)